

「対応」はあっても「向き合う」ことがない

岡山市 小学校教諭 青山新吾

夏休み中のある夜のこと。

昔からの知り合いの親御さんに誘っていただいて、夕食会に出かけた。皆さん、自閉症と言われる子どもたちのいる親御さん方である。

久しぶりにお会いし、子どもたちの様子やご家族の様子を伺えた。美味しいお酒と料理に舌鼓をうち、楽しい時間が過ぎた。

その時、あるお母さんがおっしゃった。

「学校の先生方は、うちの子のことをとてもよく考えてくださるのです。自閉症だから～の様に指導しますって言うてくださるんです。それはそれで、とても有り難いのです。でも・・・それは『対応』なんですよね・・・。『対応』でしかないんです。『対応』はあっても、子どもと向き合ってくださいらないんですよ・・・。」

ほろ酔い加減にお母さん方のお話を伺っていた私は、飲みかけのカクテルをはき出しそうになりながら、そのお母さんに目を向けた。その方は、笑ってくださったけれど、私は一気に酔いが醒めるのを感じた。

「自分が今までやってきた仕事は、『対応』だったのか、それとも、子どもに向き合ってきたのか・・・。」

口には出さず、心の中で自問した。

そのお母さんが続けられた。

「『対応』の前に、その時、子どもはどんな気持ちでいるのかを想像していただけたら嬉しいのですよね。また、親が、どんな気持ちで、今を過ごしているかを想像していただけたら嬉しいのです・・・。」

このお話を伺いながら、私は1つのエピソードを思い出した。

運動会が好きになってきたある男の子。その子が、どうも苦手な物に、スタート時のピストルがあった。

1年生の時には、担任の先生の配慮で「笛」でスタートしたという。

今年は、昨年からの引き継ぎがあると思っていたところ、それはなかった様子。ピストルの音がしそうになると耳を押さえてしゃがみ込んでいるとのことだった。それでも、大騒ぎすることなく、なんとかその場をやり過ごしているようだった。

本人は、毎日のように担任に

「ピストルは怖いから笛にしてください。」と訴えていたことを、後になって伺った。担任は「換えられないから、がまんしようね。」と対応されていたようだ。

運動会当日、大騒ぎすることなく、耳を押さえて我慢する彼の姿があったことを伺った。

彼のご両親が私におっしゃった。

「親としては、複雑な気分だったのです。大騒ぎすることなく、なんとか過ごせているのだから、それはそれで良かったという気持ちもあるのです。でも本人任せにせず、親と一緒に、笛に変更していただけるようにお話を伺えば良かったな一という気持ちもあるのです。」

でも、先生の『対応』はいろいろあると思うのです。だから、『対応』の善し悪しじゃなくて、本人が、毎日先生のところに言いに行っていた時の気持ちを考えて欲しかった。

親が、どうしようかな一、こうしようかな一と考えているのだという気持ちを考えて欲しいな一と思ったのです。」

向き合うとは何か？

それは、子どもの気持ちを想像し感じること。

ご家族の気持ちを想像し、感じること。

その上で、『対応』を考えること。

これは、子どもを取りまく周囲と紡ぐ「ストーリー」だ。

子どもとその周囲の人たちで紡ぐ小さな「ストーリー」を共有できているか。

自問する日々である。

